



中村俊定文庫
文庫 18
179
2



享保六

沾位

餘花千二百句

下 乙



坂本冬也
 七社の内子各
 人のまをり神
 樂の原し幸
 崎まて供馬代
 としてまうりて
 又舟よてこき
 久原し

至るころり
 陶るとのり
 早ね申く所

唐崎夜雨



客人のまきもとほらる夜れぬ
 麦のまのまけ小曲了ん少
 重起り机之つて入るめく
 竹れりーらく猿と夕月
 縁くまら子声万聲手織信
 関所へ二所もまらだん次
 外記内記筆を鴨拵まきり
 つかた重く耳そく引
 白土を粘く廬山へゆりあは
 月下

沾濕

貞仇

少

松巴

湖舟

古井

兔谷

法休

月下

磯多此田の
の田より後分の
入交てあると云

其玉姫を
のたり

枇杷葉飲る今よけさる 嘉瑞

いつきおし思ふ事此舟下し 南阿

十年少りて城へ囚人 漣舟

ひつち田の端に此田の曲つり捨 倫里

鹿よ進一く胡才知る狐焦 立志

新月の男あ黒く四下哉する 望燕

いたく桶よ白いも山かけ 沾岩

火くお見乃進いそあをよや吹と 沾石

お今つ屋まよく傘下詠乃者 賦泉

けさ気をはりて誓い 嘉葉瓜 飛泉

告下婦のあこれの女房 千山

ちうもむら越中御と詠り 朝叟

重石のよふけ合るり 鳳紫

二 瘦く人二川取よあ寒苦鳥 苦峨

嘶く雲よ全盛をよとく 沾宇

おしよれあ乃よて圍姑おり 柯木

あるさきかこふく 丞を待損 沾枝

撞撞から海見の白乃より曇 沾若

去船乃よりり醫者氣中あき 沾化

いより外れ砂糖を勉るる 只尺

越中島江戸
はゆつてさく
るりさくし
古今序にさき
山もぬかしの
ちうひろより
おこりてと有

かろくちうこの
系存れ上よえ
さく色すこ

旅館無火暮雨
竟本朝文粹

たふおれてささる
一ふし

わーい
ほ代やそうおれ
とふま之さし
ささる

下二

水凡品も時喧を多雨此魂
 福宜乃ハ布子此晴を引遠
 又う津捧ふ鮎沈む波
 昔ハ松名付ぬ時方さそん坊
 さー人ハ恥海屋うー盪
 風の月石答阿そあくーくも
 とアおれーうあふ方を蜩
 二う
 段引ち夏より縫う秋の嶺
 拍杞茶たをさそ糸盤をも青波
 鮎有まうま下田を越の杉林
 立志

安立町大坂

女衣帯の様子
めつふいかり

たした仕書
高治水書経

そつと細工を清漆よ照ふ
 才一の胃此締へうけぬ雲此嶺
 風乃阿けさう六くふ心
 とうからー安立町と鐘ハ又
 かるまとほも糸糸と落る現琵琶
 強ひ目をさ盤へも糸糸と月此釣
 柳とけの白も糸糸と食はく
 双六の阿ありかぬおハ者とさ里
 風の中をか此禹持いそーき
 うらひさしハ夫ハ人ハあめ此書今也ハ
 松巴

下三

長崎
山崎 車山の向

清志乃是くハ源子畧山奇 仙宇

黄浦此族よれり日本晴 沾枝

玄園も阿武く國丸と舞 倫里

羽脚を象執えく海原河 雨橋

下ヨホロ此婦も並木成へし 沾苗

と事からう華一拜お交心着入 表珠

勸化の中く味る金明も 満舟

かくて只今も碓槽のりまを 沾井

語残しく鶯語日暮ふ 沾石

仲しおき波と子弓此ぬすえ逢 古井

かづかひ少んくゆり席き 柯木

師とあまきハ四角形後を口説らん 賦泉

影もつきけれ空を葉乃く有 徳舟

火車又舟舟松此あ堵も覗けり 沾徳

蓋かき現るるおるきこのこと 朝叟

は紋をみてハ言はれと旅そろ 煖燕

三三 壺口をくくくく 一時 沾宇

海道を往く少む樓ぢやふめき 月下

小役切あつらふ樹れ木 子山

雨らも入五士科も多咲糸 沾枝

車へ管絃つぎ
て女のもくも
くくくく伊を
おきり伊を
くもく
わくくくくく
仲しおき波と
子弓此ぬすえ
逢

原中明石を
秋の夜れつき
りの約よこり
あふゆを井こ
りおれとすれ
ましえん

物足るとあり
上着めきく
るり

多賀社 近江

近原古甲

大津姑むよあつし多子坂

立志

列信列る七ヶ

姐箸をまて本娘月白

倫王

毛尺如茶碗を後朝とこれ

法作

法作

帆へ便船も川も結村

松巴

安き身は漆比余り苦み成る

山夕

草履のつらえのりも来り集

貞伏

二味と〜ぬ茶ハ先へ茶つ〜世

朝叟

鄰ハ〜〜〜離へ相突き

雨橋

延名(延)せすハ是も大打も何ありん

仙宇

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

沽岩

呉銀座を邸而したをきこまり

只尺

流れ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

古井

若お強望政を殊をぬかきや

角阿

仕立〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

眠泉

衣〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

飛泉

ちきり〜〜〜〜〜〜〜〜〜

沽化

何〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

柯木

時節強ひ乃奥歯かむら

風繁

おほら〜〜〜〜〜〜〜〜〜

沽石

その後くめ
誰美と云

老千寒山
拾得虎よて
四睡し

茶力つよき
申すきひり
あつと云

かのがら
〜〜

白糖花移
るむなり

西所極況
ウツロ
こや戸をより
いふ小神と
あつと
中難所なり
お根をみね
記ハこのまゝ
さくや姫と
と見さるる
約の神申人

早きを賓と
云ひ晚き以客
と云田圃は待
まらげらる
鷹賓也

大お大陽之
的ノりこ

源氏うはやく
のまゝと
馬子之

十番よつち笈摺し糊

泥垂れ縁側通る月わさる

秋を引ッ流く公敵は唇

白糖の花ハ瓜取さすいり

面伏を箴巻の鍋のわらぬや

古鉄買はてちりし聖像

古池乃菊枝を糸の扱をる

筆あつとめ糸小調市の灸

経官は菓子色以白集り

北を運きは家よ阿さつき

望田落鷹

賓ハ去りしと田縮むし

凍を井し木犀枝を

関札は唐流のき八月を仰天

雲もおさ悔りたよりかまふ

そら移美をこもらへしと久隔

やぶのつらとよれも河毎

風不るし洋をん若ハ草を摺

は産をいなきとも古ま

二三年人形つひこる魂

青瑤

沾露

沾枝

沾岩

角阿

漣舟

苔峨

千山

雲燕

湖舟

沾石

沾徳

海宇

佳風

雨磧

歩荏

沾露

鶴洲

沾竹

七語谷

北溟 莊子道
遙游

身にかまらぬ
形容を云ふ
七叟七人の老
人し 隱逸傳

涼しきと云 白男し かしき 李溪
 根岸川を金の焼斗と改邪 芳津
 北溟さしき 鑑^{トヒウラ}の河と 夜霜
 籃^{ハシ}のけれ誰の言が 三つは智^チ 湖干
 向^ウ勢^セ振と見え七叟 賦泉
 山際れ看板^カもく^クと^トむ 沾了
 口上もらせ 魚一色 芦中
 四^シ角^{カク}旅^{リョ}扇^{セン}れ骨^{ボネ}を削^ケり^リ 沾岳
 清華といへり 鏡もおろさる 我常
 月よ雪後家合せ 赤^{アカ}蓋^{カシ}袋^{フクロ} 如沾

あまのうき
いひしうき
一与を

くちをく
いしあし
あまのうき
のうき

撞木のさける物おれ 角 釵梁
 小山すまよとためて 室よりむ車 隣笛
 曲水らりき 蛇^{ヘビ}の^ノけ^ケ 今^{イマ} 琴風
 二
 多^タ言^{コト}の^ノ虚^{ソノ}を^ノつ^ツいて^テも^モ日^ヒ新^ニの^ノ 安士
 戒名を立鎌倉のちくさき^キ 沾洲
 魚を何時そすもや漏^ヒら^ラ 可漆
 綿木の用心を^シこ^コよ^ヨご^ゴよ^ヨ 秋色
 候、換^カ越^ハく^ク中^{ナカ}家^カ 仲^{ナカ}立^タ 左右
 物^{モノ}も^モき^キた^タ云^{クニ} 廣^{ヒロ}け^ケら^ラ此^{ココ}垣^{カキ} 沾雪

海濱瑠璃あり
古代めきし
りきを云
買ふ人よ
つるまふ道
たりのま
つるまふ
やまのり
末の白を

饅頭も大般
着も天朝の
物とん

他郷へ
そらるる

奥方へ
あつた

原はあり
海はあり
のこまけ
かゝる

不^らる^たあ^らき^つね^つき^らん 遠^宇
 あ^つた^ら人^はあ^らき^ら系^流方 近^京 近^京
 越^へき^ら山^峰越^買か^らよ^らく 沾^德
 い^らか^い髪^を切^きとい^の口 李^漢
 七日^のか^ら一^日 秩^麻姑^ひま 步^雀
 白^見せ^ら月^は氷^乃ひ^く起^るの 海^宇
 下^代の^から^のそ^のみ^の中^にぬ 露^谷
 饅^頭と^六百^歩を^越さ^れけ^る 沾^竹
 馬^別當^へい^の文^言 鶴^洲
 冬^いま^は此^の厭^ひき^きく^夏ま^ぬく 夜^霖

あ^まの^王と^や海^の美^は日 安^士
 と^いく^陽光^は目^はと^まら^ると 左^右
 梯^の背^中に^丸い^る風 芳^津
 我^の城^は一^筋を^ん道 琴^風
 学^の察^をか^ら下^布 如^沾
 越^へき^ら山^峰越^買か^らよ^らく 芦^中
 げ^植海^は根^をつ^つ 沾^岳
 海^は在^る神^をけ^お解^をと^手 我^常
 今^鼻鏡^すと^ら世^を 佳^風
 落^しか^げ月^はく^く現^かき 賦^山

は草切て約
てとげし次
中へはふるお
ひり

ト者、之の
毎年、ていふ
すも、し、有知
ふを、し、り、多
き、る、り、を、い
ひ、ま、重、天、雪
幼少の神はし
男衾上郎

藏鈎 拳酒
漢武鈎才史
人のりニ出

伊吹 近江
下郎もあつて
は、り、上、方、は、た、の
白、と、き、こ、中、は、
近江、さ、り、も、中、
よ、し、り、る、伊、吹、
下、郎、と、中、中、
下、郎、と、中、中、

久止の状、
活草、
砥石、
二代目、
不便、
年、
吾、
手、
下、
藪、

の状、
草、
石、
目、
便、
年、
吾、
手、
下、
藪、

の状、
草、
石、
目、
便、
年、
吾、
手、
下、
藪、

の状、
草、
石、
目、
便、
年、
吾、
手、
下、
藪、

の状、
草、
石、
目、
便、
年、
吾、
手、
下、
藪、

の状、
草、
石、
目、
便、
年、
吾、
手、
下、
藪、

の状、
草、
石、
目、
便、
年、
吾、
手、
下、
藪、

の状、
草、
石、
目、
便、
年、
吾、
手、
下、
藪、

の状、
草、
石、
目、
便、
年、
吾、
手、
下、
藪、

の状、
草、
石、
目、
便、
年、
吾、
手、
下、
藪、

の状、
草、
石、
目、
便、
年、
吾、
手、
下、
藪、

の状、
草、
石、
目、
便、
年、
吾、
手、
下、
藪、

の状、
草、
石、
目、
便、
年、
吾、
手、
下、
藪、

の状、
草、
石、
目、
便、
年、
吾、
手、
下、
藪、

の状、
草、
石、
目、
便、
年、
吾、
手、
下、
藪、

の状、
草、
石、
目、
便、
年、
吾、
手、
下、
藪、

の状、
草、
石、
目、
便、
年、
吾、
手、
下、
藪、

の状、
草、
石、
目、
便、
年、
吾、
手、
下、
藪、

の状、
草、
石、
目、
便、
年、
吾、
手、
下、
藪、

の状、
草、
石、
目、
便、
年、
吾、
手、
下、
藪、

の状、
草、
石、
目、
便、
年、
吾、
手、
下、
藪、

の状、
草、
石、
目、
便、
年、
吾、
手、
下、
藪、

流らくあはるる赤火にゆるる家 釵梁
 なる味嘆かみ 影るくゆる年三友 近州洲
 生り菓をのそむくま 武士 我常
 役立の色を一葉も勅さく 芳津
 援荷も接す 風を引さる 渚亭
 大坂をとりて 乙女にそむくま 立神 安士

とあまれむのみ
と 倉山定家 名
寺ハつがさう
松原子河内心
 今日を泣のらハ 龍少く 峰の毛 泊石
 今も 田も 黄門 流杏 芦中
 お徳時 越建 坂 滑げ 尔皮 存 如泊

妻と猿人 方七 川より 嘆 泊竹
 面白き 此より 倉く 川の 帯 泊岳
 首乃 流よき よこま 風流 付 可添
 さふ やつと 人き へ 子代 毛 籠ん 秋色
 我ふ とも 生 美め と せい 小 泊苗

山如 砥川、如 帶
誓 約の ゆい
 月見 入ら ぬ 籠も 老と なる 泊雪
 後次 越志 かん ぶも これ 秋の 声 左右
 葛 糸から 取 けて 八 投て 麻 鶴 走 隣笛
 桃子 八う 毛 色か け 蜻蛉 芳津

あしに につつ け 遠
 流ぬ 志 せ せ 泊 瀬

下 一 山 守 山 守 山 守

通名とつり
その職の全を
此人の耳が
〜ぬゆ〜

素人のあらし
甲とりのあらし
〜ゆ〜
〜ゆ〜
〜ゆ〜

小浪の若列
比良の海
七この屏風を
眺むと〜
茶室の琴曲
よ〜ゆ〜

〜ゆ〜
〜ゆ〜
〜ゆ〜

十七八の筆一紙〜
山伏の二人おハ〜
芝居此と〜
通名とつり〜
尼の崎志や〜
星を北に吸膏〜
〜
す〜
炭を斗〜
鰯屋を冠〜
こぬ〜

比良暮雪

七人をとれ〜
た〜
荒〜
おく〜
賣買〜
狸〜
窓〜
〜
十〜

沾徳

沾洲

白雲

倫里

釵梁

百里

皆可

回岸

東海

科戸の風
あましく吹風
なり中臣
又乾の方北風に
江の浦北海士
とひひけり

人ととらうきい
海え坊のおか
まに牡丹花と
もさくへきん
三愛記 牡丹花
香花酒の事
をぬ

借らう小神を
いしうまけ
ちやまけい
もあはれい
こあし

そをよみあは
まらりあり
とれし

とらうつりの
かしとらうハ
道きともかき
ハしぬとけ
おしきん
岩倉山城京
ちきん

危丁おさぬさねよあ〜酔 仙里

水仙よそつ逢合する勢草履 半鱗

科戸の風もませぬ松の園 松巴

江の真北阿よま裸ハ冷〜き 椿子

行年あ〜二ツのくさき 柳芳

竿策を調市も吹く戻〜引り 喜我

壞の住居たつ女と天〜 立圃

牛乳背よ人ととらうの尻も積 佳風

萩の上葉〜カゲ〜林の子 仙鶴

月い時馬草哉あ〜山寄〜 素丸

狂がと鴨の時哉初〜い 喬谷

毒のぬきやか娘長流来る 琴風

いし〜まけり体む十往 义魚

ま〜ゆ瘡あり捨か〜 祇宅

ま〜をあげ〜又男出生 沾山

急度〜〜申も立す生腐持 巒雨

不乃矣見〜〜遊〜お人 壺月

傘持おきとこる〜り〜汁 沾化

なふをい〜〜ら散る後 和風

汗かき姑小娘き〜ら〜只の子や 沾十

三輔黃圖
歳貢為郵
傳者一郵傳
むすはるは

女のおもゆえん
中阿ハヤキニ

るは音あ迫つ
は

神の名中臣

涙よ人を
はりあまも
いそむを
ともおぬ玉

けらさよこゝろ 葉代の帝 椿子
 星合を光心れく 雑水引 倫里
 月よめんせぬ 紅花の 挑灯 皆可
 新そまは是 郵傳地物か 仙里
 浄糸我常 管乳も 佳風
 古帳をくら 西 方わさ 沼洲
 家徳利を 中川 半鱗
 くら宿を せ投 立圃
 鷹よさひも 東水 東水
 多難を 仙鶴
 離るぬ 琴風
 兼咲く 义魚
 気吹く 祇空
 似我鋒を 舞月
 同心野 素丸
 鬼百合花 和風
 硯よ人哉 白雲
 洞道も 百里
 百村芥も 沾徳
 月此鴈つ 回峯

鳴海石臼屋と
三
の酒の出るせ
あはし

れま
細き岩谷ちり
差ふらた谷し

はるの女の形容
を云 梨花一
枝ハ美人のた
とよま

さのしほ
うら
うら

鳴海姑らりり秋に可成く沾化

歌のめくら里梨種の新さ 松巴

新耳八人うらうら姑筆 湖十

南洋姑板おあらぬ舟指紙 高谷

之所芸川に扶持方日しる 釵梁

二階てハそ名をゆら能玉也 柳芽

志羽姑もさ墓下へ何あさ 高海

月加む奈く女躰を苦しむふ 泊山

さか新造を仲人のごと 春我

新造さつ飛時待するも石調法 半鱗

うかさ新葉めらの岩影にサ 和風

切せりわ何うよあさくちらり 佳風

灯欠阿達あたりそのあられ 仙露

丸くももあときげハ梨花枝 沾徳

三
さつ 縁をさつ月柳 雲 仙里

合羽 ともすふ女と者か筆 百里

枯ちや山嵐姑縹の水あはひ 白雲

しうら断ぬ定歌乃四 回春

蒲風は吹きそく仕舞とり太刀 音我

あまのあま
あまのあま

あまのあま
あまのあま

陳三官の館
袋衣 江戸三田

樂人のまはさるりときく 沾洲

お告ぐまはえ結のすくささ 椿子

二八のひるを飛ぶそのを飛ぶ 倫里

馬控をくくお地おさくとりや 湖千

兼女供養よ君かーしをけそ 松巴

漢之入選日よりくら面は皮 茶丸

伊と漆をとるくく心ひ病あり 柳多

嵐牙糖よ片く手鑑集は前 春月

葉の苦哉念ふ合嶺巖りの南 沼山

名 手はらき能誰の陽氣ふ之稻荷議 沼化

二反吹立く火伸並をぬき

雨木紫ふ岐阜は海引く京詞 東水

内と心まよーくや舟引 答谷

紛とくげくを越ふも見苦き 祇衣

灰まきぢい揚州からを鳴 密雨

辛うーくく一日おーれ山 叙梁

乳つゆれとをきく夏の夜は月 立圃

おめくくと仕合手形よと上げる 琴風

ひらりと同帳差くすむ 皆可

夕陰よ修り眠るハ始りて 回峯

樂

昔此を此詞
つきハとれを
紫つきよりん
信長らは阜
らせし神ては
阜のこも紫つき
ゆーりらけし
と使物くらの
くーくや付

揚州 樂子
地あるをりふ

大雑書を
のりも

屈原漢文辭三
にこそや
あつあふん

舟よる別々木似の致 湖十
 男出り初海へき油出 沽洲
 志やんとさせとハ親を心 素瓦
 晴天よ縁つてか少々の艤坐 偏瓦
 屈原漢文辭三 同大夫の糶とより合 欒木
 舟掛とハいふ此帝村女心 柳芽
 新入何つくろハ何よまより 沾化
 以の可泉際ハ内外の寐せ配り 立圃
 脾胃虚ノ業 大ニそくあし里魚湯乃あ 吉我
 熱領ハ嘗く明くをハ一全 百里
 千ハくくつけ流生山吹 半鱗

市一石不三
唐士明列
も富士足
とく後何
といまら
あ

身ゆき人
の解を云

不二 冠里
 重石也や四州斗 駿河なる
 とくも 殊別と 厚其厚くき 沾徳
 垣下門設ぬねらぬけハ之 亘雨
 もやら何し 火所お水 我兄
 築菴ろ志きりハ海き石も有 雪凍
 人小れおくハ芽ハ起 弱 仙霧
 り月此はぬふよきぬ柄下 皓 琴風
 上ハくもよき 横ハくハ萩 吉我
 お遠里乃親ハ道坂すハ遠 祇堂

酸も其いも揖此意ふく 雨擋

神風以神かきうらら 神風如一ももん 乱鯨 乱絮

興を少川かきうらら 興を少川よく ね定不 百里 白雲

公御非王命而 長とく 越ね塊也 义魚

不越境ヲ傳

錦木此饗の具ハ 和推

秋の跡は篠 毎分一袖も 主此面ら 碧谷

未いげく 根来乃よく 新枕 風葉

是ら四十能飲付 序令

濱焼の骨を 蓮之

公平本よ成中ノ田の 海宇

花這き氷室此布子とく 沾洲

小中望とまげく 沾岳

年一とついで 抱き 威士

足袋此下手よ 只尺

悪るういふま 文東

芥根不埒ふても 壺月

昔西うら 柯木

火の早うふく 沾山

鬼神を同行 東水

女子を云

白盤森 江戸
あり

子梅もさきさき裸也 萬族

神宮此頭中かれハ伽羅も少 鬱雨

きし水ひとり大玉も月 雪冻

奉幣使との 照时ハ蹴揚を振ハ白幣 我兄

秋の 後儀し〜カク夕白如親 祇空

如意物^の秋 却来立と切き引文七教^のし 仙瘠

矢見と来て 後ハ礫石^の道〜如事 凡紫

洲^の流^は灌頂^のし 祥^の 百里

在り^の如^の肩^は如^の之^のカ^の頰杖 和推

聊尔し^の飽も切らぬ此^の茶臺 白雲

空へ^の換^らら^る灰^もき^り金 沾徳

け^の色^りより^の川^か〜^の橋柱 沾岳

辨^の由^もとせ^の巫子^を見^おり 沾洲

つ^の事^も来^て汝^乃上^の町^路也 鴛谷

合^の湍^さげ^く月^宮へ^の入^り 乱絮

秋^は〜^のか^ろる^も〜^の海^を結^の垢 海宇

流^人の^の睡^く白^く死^る錦 安士

及^つ〜^らと^の女^子も^もき^む如^も 長我

侯
住所を久て
いぢりよむ
白く誤改上
編語季氏

海乃つま此
白く

枕麩 逢ふ清 熟供此 萬文東

摺小 木を考 見る心と うらふ 壺月

東のふと 理雁二 筋射 殊一 万旅

鐘を 踏山へ さつち 之はく 柯木

木像を 薫火き ちあき 此序令

志は 小るへん と母 姑急へん 之戀雨

近年を 破子よ ためぬ 従才あり 又旦

は免 考い 盛一と 志つむ 加賀 深琴風

隻、瘦を 得知事 ぬるの 小振て 屋雨橋

和是 しく 東る 君方 子世 海也 泊山

此れ 小免の 毛て ばい 月も 風仙露

四角を おしり 望十 園子 見世 喬谷

朝と 小煨す 乳 乳木も 三輪 組雪凍

白 後ろ 阿そひ 状を よも くら 泊岳

海さ しく 今日 姑 候法 猪よ 菘白雲

代を もと け 針舟 小畜 盆も 了 推和推

外 郎姑 本家 哉今 逢ハ 涼一 凡紫

編 ぬん ぬりと 何 胃姑 莖海宇

く まさ け 小千 住大 木戸 あり 花 蓮之

物うしくんを
源氏うき舟
うらうら
うらうら
うらうら

うつのやをり
ていつた
みつさく
老らわかしん

あやしの心を
りうら

あまのつともしも小婦ふお髪友 沾徳

あまのつともしも一文字の言灯籠 沾洲

別つ星を二番見乃才 又魚

此月平目此表是姑ら 百里

市を山層木肩へ急ふ草 乱絮

中庸の力よりあしあ也 安士

水予見へる隣うらなせ 壺月

いづり上大徳院のそれの陰萬夜 名 磐谷

食喰ふ雑子此こいつちうせら 磐谷

仙人の地系引山むせうく 沾山

奉納の道々を 太刀戔油よこのささひよ多里 音峩

傘柄を振立ちら連る句も出は 戀雨

金合同屋もらわしと断 序令

奇矯のつともしも 時をえくあふ付よるも太平記 柯木

鏡をほくしり 嘉祥饅頭 祇空

鴻原の隅に地籠も涼くも 琴風

仕官のつともしも云 思ひのくまを持せぬ及姑も 沾岳

そはかりは長大 ともかかちりく子よ小寅に起 文東

寺ありのつともしも 疋氣もやすく日高川越も 赤水

日高川 紀引 善妙月 町新ひはけこまきく 葛橋

上と

けらる太鼓よ紫よきり来る 仙露

石の如くあや三つに二つ玉を片 乱如

阿難てハあー一 名を止しき 白雲

水仙の又寸のひてもうら夜 又魚

串もさくさく煙くさくさ 雪凍

この橋は病かりりり新地を 序令

主従は風へさかい新地を 沾洲

明日の草履うきく米五俵 青菖

海老尾ももさへともか 琴風

花の時群集乃時片袖の天露貫 沾山

陰も深固り 松と紅梅 沾山

後許芥子句負外一

松寫

沾城

鳴の教と 松のや百よむ中此破子香

4鳥の種 色多能 白衣よ流家袖を露玉

おろそろえれ 煙開ハ渠よ難役 沾洲

ふちも暗まらん年と又馬 沾洲

最小蛇の亀つくりはるごと君 壺月

あそ麻糸ひきく神鳴も暖 文東

使者屋よ木綿引裂衣新地月 只尺

沃梨小葉をこ葉を掃 沾十

捨くれ子服茶臼秋の声 椿子

鳴の教と
4鳥の種
おろそろえれ
おろそろえれ

ひくくせいの
おろそろえれ
おろそろえれ
おろそろえれ

燃花微笑
おろそろえれ
おろそろえれ

系信の人の
ちよよと云

くまのあふ
ちよよと云

神人——とい乞食云初尾
柯木

登陸——善よ下上る寺晴之
立志

子よ何ぬくふる延天命
知足

少糖ふも碎ふく清き乱髪
法竹

錐の裏此半——むりと出系
松巴

庭おし溜乃得掛を袖めせ
商人

驕くのけて我よれどあ——
泊岳

鞆カハキを絞系するふ舟々け
琴池

竹まの代中燭よとを——さき下詠
泊石

利よ酢ふ子月此歌を封——引り
徳宇

山石よ極ふる山ハみちれく
泊枝

此饗蕪のかけてもたしり先
泊化

何哉草者ハ公事——此一列
朝叟

お勢アまの命を教へる所阿己
露新

此も松田此桶於淋——き
泊山

草道葉此旋毛ともいふ馬也
麦莪

痛みみくふ此濱縁
紋梁

つ道もなき絵刷毛此水乃あつて
海宇

裾へ小袖とりふりあやなき
徳純

せ——此後神ハ諸人まうされく
白雲

ひぬまき
せとりのり
あやなき

る此は毛

此乳腸桶
の時さうら
なり

まけこも
共此をの
ゆらゆら
神およあ
向ふあし

下三十一

京ノ町の夕

大工次子ノ免許札も

湖舟

籠の内此鳥ハ其の荒黽

沾宇

夜寝の伊
直をり

慈徳乃婦ハニ藍此ノ地

函五

燕ノるまつと人ト夜此夜

東水

足取て
占めし

華毒の邪ノ成ノ是占

晋如

若此月ニヤ體菓子此ナリ拂

あ士

戌秋合点ノ四十寺

雨磧

借ノ金銭ノ廣げの下の築

沾露

浪人ノ元祖ノ母

雙燕

旅篋ノく尺ノ松乃殊

倫里

形を云ん

版立ぬ日ノ暑さそん中家

翁谷

新流の麻像も所ノ善原磬

义ノ里

新宿のハ送才又甥

仙里

無述ノ膏糸細此ノ如リ

序令

惚中ノ何も事ニ失

可圭

納豆此糸ノ引ノ纏

可水

月を濤く外乃吾風呂

佳風

病めの子を坊主ノ子ヲ窓此秋

子江

酒印ノ横へノ春法

沾節

堰を来る市ノ丹生此松

風葉

此處ハ何
もナシ

中孝用^レ勞^ラ
礼記祭義ニ出

三
 的日^リか^ら雉子^の列^{和推}
 道^きも^纏手^拭涅^槃吐^秋
 瘡^とと^くぬ^も玉^極女^伎の^所蓮^之
 乱^るや^喰少^も泣^のも^{十二}筋^半鱗^半
 只^ああ^まあ^まあ^ま孝^法徳^法
 寄^る来^る四^本挂^る誼^請上^下沾^洲
 鵝^も声^添る^吹る^風猫^徳宇^法
 坊^存懐^ある^事も^分る^拵の^法法^枝
 三^ツ椀^代荷^そ民^乃落^月毒^月
 佛^眼の^肉あ^もあ^られ^輔と^恨く^柯木^木

標^えと^能も
あ^き解^え

蘇^倫庵

信^者其^具
あ^ま々^今族^族
園^のあ^まの^下
と^云ふ

四^句ノ^文ノ^子
林^行局

静^け親^し
あ^まの^り

着^衣る^りり^帯成^ん只^又
 中^結の^ら知^るぬ^もも^分る^深の^十
 七^府海^一く^豆腐^呼白^沾宇^法
 現^く引^く長^屋と^勢蘇^倫庵^沾山^沾
 魚^孫ら^叫子^と纏^る山^義魚^魚
 三^三
 雪^山の^てん^かた^怖い^百合^此口^文東^東
 幸^筈へ^情不^棟上^け偏^已
 陽^中代^般心^勢の^笑ひ^合私^推
 九^人も^水と^絞る^禪沾^露
 氣^のり^の校^の前^司一^廻扶^持佳^冷

栗水もあられ下よき文 秋を

新の時多職やりも勝あす 沾岳

浪小まれとも鬢かられ老 東水

之支く身と瓜連の蹄を撞 智谷

狸の討と里へ出ふ月 高入

四ツ海へ蒸籠一荷舂 湖舟

内場を仁の乃と乃引菜 子江

折ふあき康熙もさぬをたれ家 念之

今も熱さめの井をさきたれ水 落新

換一くえきハせく換ハ水 仙里

大切れ是も形す替へ袋 密雨

毒よあらぬを憶良等と提 麦我

年此矣乃引ちつまら崑崙人 西磧

俵を方たく作らぬのそ 女士

何と淋と坐えよ成川仕まら 晋如

蕎麦切をきき新れの松 半鱗

幕代よ我ハ白ふくたあひを 松巴

和韻の唾硯ふもせよ 椿子

逆刺ハ是半日此礼の用 釵梁

王のそと白
修之

瓜連 水戸の内
岸と檀林と

合山ノ白

清康熙帝
花房ハ楊也
妃の所とさぬ
アノ

位元帥といハ
久らむ子ま
らむ一カ紫

旅者の幕と

誦詠
礼用貴和

何う横川下し何月此客
 初陣乃無事此初放生會
 苦竹吹もよ子高此秋
 鶴舟とよし一鉢る麻頭中
 君と富しよの中此横着
 飯袋もなき園う下しさきむしこや
 環乃端中丸茶下箸
 吾舟よもよつて付る大ま坊
 又二歩足せれ馬控行こしき
 こまにむ小横敷何れむ乃隈
 夜お衣の美向る代し考れ云
 白雲 沾石 沾化 沾岩 序令 朝雙 琴風

むきこや
 おんえのはの
 名し

本名教士の
 第士

後竹花子句貞外二
 五橋立

鋤鱗

此又鳥の
 三六名あしと
 二白移る
 毛とととととと
 ころりけさささ
 つるさあし
 天の橋立 丹後
 五此井筒
 つくつ橋立
 ありたつり
 せは思し
 みむとつり
 井筒あり
 和名式あり
 蘭亭記
 曲水のり

此の井筒乃さつと解
 料理めく蘭亭日和拍よし
 鼻馬も此倉此振打あひき
 風をゆ乾の大工季ととも
 軽一二番関哉揮ハ
 此種 狼なきと産屋へも

立此花見鳥
 解
 沾徳
 竹筵
 喜哉
 蓮之
 漁純
 安士
 貞佐
 半鱗

醸くもく 水も沙利あく醸あく 沾化

着るもく 江戸根性上 燗帷子 知足

似合井 志の さい 森つゝ 沾霞

竹松垣何を 足おし 気色む 沾岳

あうせう 前つ ぬえ 沾長刀 椿子

はくく 我久文字よ 可圭

草へ 餅豆此湯の 餅 可添

つましく 盛親法師 今りし 先松を 此おま 沾草 五磧

牛祭 此とこ やうと 中き 牛祭 沾牛 法弁 松巴

居る 次口ふく 夏ハ 身も世も 沾岸

新特 毛詩 永爾 新特と 呼き 養子 沾山

以礼嫁 一 二 後より 糸引 ちうた 沾宇

皮火と 火焚こ 國 戀雨

寐ぬく 小樓上 有る 賀燕

初多あり ねえ 我 出の 沾人

その 暁し いや ちうと 連翹 砲ころ 鋳梁

りや ちう 津て 足ん 沾 隣笛

分ら 是を 手 子 鶏 沾石

鮎菴此借之

輝^うせ^す來^る宮^殿の^鮎 琴^鳳
何^おつ^け玉^星川^のの^ええ^や
毒^日

羞^と同^ても^於ま^りう^け
白^雲

飲^のち^い恪^き気^ほろ^りと^風仙^菴
夏^亭

月^もや^るさ^ぬ水^桶此^鑑
沾^枝

お^灯籠^を麻^尼ぬ^きた^ら也^也
赤^水

秘^あとい^つも^い少^参て^も決^し
仙^里

い^う知^らず^に徐^福の^支夜^金
智^谷

元^日敷^茶の^鼻小^香を^拈
千^江

花^聲也^見も^もき^夜あ^やい^い
立^志

年^菜も^もや^柳深^を也^也
义^魚

ノ^の小^鮒と^う一^む
文^東

吹^玉吹^乃海^家人^人鬼^鬼
晋^如

去^中ハ^云ど^とり^ねと^通里^標也^也
湖^舟

で^川と^肥り^夜い^けと^と也^也
倫^里

雷^此月^もを^打雑^子
風^琴

ひ^ちの^離を^肘と^腋押^押
序^令

木^香也^也白^市富^事
佳^風

気^違い^の又^屋根^がを^抜
秋^色

花^も右^も引^ぬ京^面拈^拈
和^推

徐福人此
くまらり

夜殿の灯籠
よひよりあり

ういハハ人
ういハハ人

ひちの離
ひちの離
一カ葉也

久魚の恵を下る味方 海宇
 願ふ作物所共々おまの 沾洲
 小刀積家兵仗者 家 朝叟
 聖上とハ婚ぬせむ村とて 沾徳
 耳へ油の落家 新人 立志
 胸おと足きハ務手ハ菜を扣く 琴風
 羽織を肩へ覧うぬ 蓮之
 床しき名有と知うは額の裏 沾化
 仇夫盛うよごし 紙屑 松巴
 此心此心はふおふふ此心此心 徳純

顔はく
 けし物中へ
 真を云

一筋配るも髪よ合ふ水 安士
 ちる目をと蟻の穴より崩初 沾宇
 後蔭の音も只二つ交 五橋
 ちとけれどもと際すら夢は有 沾岳
 坊の多人情を焼米小寄可 知足
 大海へゆきうけらる大角力 只尺
 木場の乾きふこもる皆を 沾舟
 勘当此天下のハ是屋町 貞佐
 水の~~~~~ 呂宋人 沾山
 何さぬ袖出用ニあをよを漕 秋色

笠屋所 土坂
 あめうちまの
 かく祀家し
 とあふち平祀
 のは裂ん

樂屋の目人
能此役おを
りおを

とてくしてよ
きよりなり

深園先生 莊子

苦勞のするも此 嘗て 集 魚 魯 谷

一セーをええく小若起しり 仙 里

竿此手柄も是如次乃家 可 主

掘ても後しと物縁麝香 青 峩

さても借りるは道で理を 雨 磧

初の地と雖も若ハ勢り此を月 椿 子

門出れあつ鄰 訃 巒 雨

花の首吟物よ首 秋 魚 晉 如

名 一 鞍 小 之 人 眠 不 寅 卯 月 佳 風 沾 枝

女房小あつ見とる形 半 鱗

下機此足小声所不片思ひ 义 魚

矣とれ隣家遊小日斗 壺 月

猪の社又此鏡の巻小こまる 白 雲

喧嘩の棒をく不 鯉 食 風 葉

木枯地とらけとら川白ひ 備 皇

笛て出あおれ今く出あおれ 和 推

くうとれ未と鬼門を怖がらき 沾 霞

死おらんとわ 佛 也 文 東

天水も釜屋ハ釜く秋の月 序 令

家久しく然
より神を
所心似合し

死あを
りし

小坊主が漕とあるは川舟 沾洲

接列し 龜裏食も訓まきくハ蓋井通室古 加美燕

銀塔の横をこ 横塔の行よ下江 徳利 柯木

十人よ一人をばりし三のりも 千江

素ふ槍こときハ清る日暮里 釵染

万木成さしあき 多く入く木葉ちる比出立菜 法竹

無庭廊下掛 かしきうつくひ小料理も乾 海宇

某之原が弦合 角之金物ち仁忠 端や 面檣

我もとを存へ押張る舟も舟 沾石 澁鈍

有心の句なり 朝叟

あはれハ詞ハ三叶集をいそおとくその法あり詩ハ執心字を主とけ
け上のんこの一作之俳におおてやれのハ可いよ上下その早を善
去こと此俳諧名人の海をそよぶくうらむし新集此作をんハ
古きるをそよむと此俳風の中まで先作をふとひ古日本此作をそ
とこれをもとて己々俳の古くなり成る由めいと習ひていひ
あやぬるれともいふある一古くして古くある句俳あり是れ
證とてとて新くして古き句あり難好時節く此れはハとて
あるとらふが達人なる一然上今も子句の心也一頭古のころに又
りしつとてとてあそむ一助ともらん

九

種分形
徳法書

享保六年

辛丑正月十日

江戶有古橋室町三丁目
福井宗名漆板

昭和十四年八月二十日寫了
原本松字文庫本
後定



